

文科省に聞く!

# どんな学生を育てたいのか 自学の人材育成を再確認する機会に

文部科学省高等教育局大学振興課 大学入試室長 **山田 泰造**

やまだいぞう●1999年入省後、文化庁、高等教育局、研究振興局、初等中等教育局を経て藤沢市教育委員会に出向、教育次長を務める。2015年より科学技術政策局政策課国際戦略室専門官、高等教育局国立大学法人支援課国立大学戦略室長を経て、2017年4月より現職。



## 学びの場としての大学が入試でやるべきこととは

入試でどのような学生を獲得するのか、大学の根幹に当たる部分。特に私学については、その力を存分に発揮してもらうために国は謙虚であるべきですが、客観的に見ていくつかの課題があることも事実です。その1つが大学は学びの場であるにもかかわらず、学力不問の入試があることです。学力の3要素、高校で学んだこと、大学で学びたいことは、入試区分を問わず確認すべきでしょう。また、早期に合格が決まる入試が、残りの高校生活における学びへの意欲を失わせていることも課題です。

こうした課題の解消に向けた入試改革として、まずは現状の入試が3つのポリシーに合っているかの確認と、その結果を受けての修正が行われてよいはず。落とすだけでなく、APに基づく一貫した入試をすることを考えると、教員持ち回りによる作問や選考体制が適切かどうか、体制面も併せて見直すことが考えられるでしょう。

早期に合格した生徒については、大学と高校が協力して学びを継続させるしくみをつくる必要があります。3つのポリシーに照らして、高校時代に学んでおくべきことは何か、普通科と専門学科でその内容はどう変わるか、といったことが検討事項になると考えられます。

## 改革のための改革にならぬよう自学を見つめ直す

一例を挙げればはみましたが、大学によって育成したい人材像は異なるので、入試改革は「〇〇をしたら完了」という性質のものではありません。例えば

記述式問題の導入は表現力や思考力、判断力の測定に適していると思いますが、大学によっては小論文の試験を個別に課して選抜を行ったほうがよい場合もあるかもしれません。それぞれ課題は異なるでしょう。

ただ、せっかくの機会ですので、本当に自分たちが育てたい学生が集められているか、考えるきっかけにはしてほしいですね。文部科学省や大学入試センターとしても、大学が改革を進めやすいようにさまざまな制度を改善していきます。大学入学共通テストでは、APに沿う学生を選別しやすいようにきめ細かな採点結果の提供を考えています。私学ではぜひ、総合型選抜(仮称、現状のAO入試)や学校推薦型選抜(仮称、現状の推薦入試)に活用してもらいたいと思います。

調査書についても、高校の先生が書きやすく、大学が見やすいものに改定します。いろいろな情報が入ることになるので見る側にも効果的な使い方を探していただくこととなりますが、多角的な評価がしやすくなるはず。将来的には電子化をめざしており、関西学院大学等への委託事業\*で可能性を探っています。

入試は、各大学が必要な人材を受け入れようと、その方法論を考え抜いた末の結晶ではないでしょうか。社会に送り出したい人材像と、それに向けて必要な自学の課題を改めて見つめ直し、改革のための改革ではなく、地に足の着いた改革を進めていただきたいと思います。

\*平成28年度文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業。「主体性等」の多面的・総合的評価手法の調査・研究に取り組み中。詳細はP.26参照